

# ある在日コリアン二世女性のライフストーリーにおける ジェンダー観の再編——民族・知・パワーとのダイナミズム

猿橋順子

(青山学院大学)

柳蓮淑

(大阪経済法科大学)

在日コリアン二世は一世が実践する在日コリアン文化と、日本が有する社会規範の間で、より複雑な価値観の再編が求められるという。本研究では13人の在日コリアン二世インタビュー参加者の中から、性差別と民族差別の両方について、幼少期から意識していたという女性のライフストーリーに注目し、語りの中のジェンダー観の再編を分析する。シンボリック相互作用論に依拠したディスコース分析の結果、以下のジェンダー観の再編が確認された。ひとつは女性的とされていた能力を人間に普遍的な能力として位置づける調整である。ここでは〈日本人の視点〉が動員されていた。もうひとつは語り手が従事する韓国・朝鮮の民族教育に関連する仕事について語る時、能力や知識、技能をジェンダーと結びつける観点がなくなっていた。このディスコース実践では〈語り手自身の視点〉が動員されていた。分析を通じて、この女性の語りにおいて、ジェンダーと知識・技能の結びつけられ方は民族的アイデンティティの確立および経済的な自立と密接な関係があることが例示された。

## キーワード

ジェンダー観、在日コリアン、シンボリック相互作用論、ディスコース分析、ライフストーリー・インタビュー

## 1. はじめに

知識をはじめ能力や技能を含めた広義の知は、人間のパワーと分かちがたく結びついている。人々は知識や技能を駆使することで、社会的に意義のあることを達成し、

他者からの承認を得、自己効力感を持つことができる。同時に、社会では生物学的な性(sex)と別に、それらが備えるべき知識や技能を区分するディスコースが産出され

る。後者が社会的な性差(ジェンダー)である。それぞれの性は特定の技能やスキルに長けているとされ、職業に対するジェンダー化されたイメージを付与し、人々の職業選択にも影響を与える(Heilman 2001)。ジェンダー化された価値観から生じる社会の不平等を是正しようとするならば、ジェンダーと知とパワーとディスコースの関連に接近することが不可欠となる(Lazar and Kramarae 2011)。

在日コリアン<sup>1</sup>のジェンダーと学び、それぞれに関連する研究の蓄積がなされているが<sup>2</sup>、両者の接合に焦点化した研究となると、さほど多いとは言えない。朝鮮半島の解放から1960年代にかけての帰国を視野に入れた民族教育の隆盛期において、在日コリアン女性は民族学校・民族教育を陰ながら支える母の姿として描かれた(尹 2015)。朝鮮半島に伝統的な、儒教の影響を受けた性役割分業は美德とされ、批判的な視座が向けられることはほとんどなかった<sup>3</sup>。在日コリアン社会内部の問題は、朝鮮半島を経

験的に知っている一世と、日本で生まれ育つ二世以降という世代間の意識の差が中心であった(金賛汀 1977、福岡・金明秀 1997)。

1960年代は朝鮮民主主義人民共和国への帰国運動と<sup>4</sup>、1965年の日韓基本条約締結をめぐり政治的な見解や帰属意識が争点となった時代を迎える。女性は引き続き男性の後方支援を期待されたが、政治運動に明け暮れる夫に対し、女性の中に徐々に懐疑的な視線が加わるようになったこと(鄭 2003)も不思議ではない。そして、1970年代以降、一世の女性を中心に自らの学ぶ権利、文字を取り戻す実践や運動、女性の置かれてきた立場を振り返る機運が創りだされていった(金美善 2008、徐 2012、山根 2009)。

さらに1980年代にかけて、一世女性の学びを支える二世女性や、帰国を視野に入れるのではなく、在日コリアンとして日本社会で生きていく道を模索する議論に参加する二世女性の中で、民族内の女性差別を指摘・告発する声があげられるようになる<sup>5</sup>。

1 在日コリアンの定義について、本論が依拠するシンボリック相互作用論の観点に立てば、いかに対話の中で「在日コリアン」が意味付けられ、共有されるかへ注目が促される。本論で紹介する韓希淑さん(仮名)のインタビュー内では、「1910年以降、日本による植民地支配を契機に渡日し、1945年の解放後も日本で生活を続けた人々を一世とし、日本で生まれ育った子ども達を二世、孫達を三世と数える」見方が基調となっていた。本論でも、この定義に沿う。

2 最近刊行されたものに、金富子(2011)、徐(2012)、佐野(2012)、宋基燦(2012)などがある。

3 宋連玉(2005)によると、近代以前の朝鮮半島でジェンダー規範の地域差は大きかった。解放後、朝鮮半島でも「儒教的で家父長的」(宋連玉 2005:262)なジェンダー規範の受容が見られたが、在日朝鮮人も「排外的で差別的な宗主国の社会的・経済的条件のもと」(宋連玉 2005:263)、家父長制を強化せざるを得なかったという。

4 連動するように民族組織による民族教育も発展期を迎えた(金徳龍 2002)。

5 鄭(1994)は、移民第二世代にとって民族文化を守るために、性差別を生み出す価値観や社会構造の解体が後回しにされる現象について、フランスへのマグレブ移民の事例にも認めている。金富子(2011)は植民地期の「『植民地主義』を体現した普通学校制度」のなかで「朝鮮人女性が不就学・非識字とされ

こうした内部告発や自己省察といった動きは、1980年代後半にかけて、女性たちが主体となり自律的に取り組む運動力へと発展していった。1990年代の太平寺夜間中学独立運動(徐 2012)はその具体例と言えよう。一方で民族内に見いだされた差異は、女性達間の差異への気付きも促し、内部の差異はどこまででも見いだし得るといふ、多様性と個別性、その先にあるものへの問いにもつながっていった(鄭 1994, 1996, 2003)。1990年代にかけ、ひとつの属性(女性であることを共通項にして連帯することへの難しさや慎重論も生み出されていく(皇甫 1998)。他方で、多様化、個別化が進むと見通されていたグローバル化は、『近代を脱する方向』と『近代に引き返そうとする方向』(鄭 2003, p.293)の二極化を生み出しつつある。個人の自由選択が強調される世の中で、依然、在日コリアン社会内の伝統的な性役割規範と、日本社会に流通するジェンダー観のはざまで揺れる三世以降の女性の意識をめぐる李(2005)の指摘もこの点につながるといえよう。

このように、在日コリアンのジェンダーをめぐる議論や見解は、時代を追って変容している。いずれの議論も少なからず学ぶことと関連していよう。しかし、1980年代以降、特に二世以降の世代を対象とした研究では、在日コリアン女性の「(日本人と変

わらない)高学歴化」を前提、あるいはそれを背景として語られる傾向が見られる。しかし、在日コリアン女性の高学歴化は一足飛びに実現したわけではないし、そもそも学歴と<学び>や<知>は区別して論じる必要がある(Belenky et al. 1986)。加えて、朝鮮半島に伝統的な性役割への批判は一部の運動家や文筆家、学識者によって牽引されたと考えられ、日常生活の中で人々がそれをどのように認め、対処していったのかについての研究は補完していく余地が残されている。また、ジェンダーに関連して、民族、階級、人種、性(sex)などとの関連で分析されるべきだと指摘が広くなされながらも、在日コリアン二世の女性をめぐる経験的な語りのデータに基づく相互作用論的なディスコース分析の研究例は管見の限りあまり見当たらない。そこで、本論ではひとりの在日コリアン二世女性のライフストーリーを事例とし、インタビューの語りにジェンダー観の変化がどのように認められたかについて、民族と学び、パワー関係などの視点から見ていくこととする。

## II. 先行研究と分析枠組

本節では、まず在日コリアン二世女性の語りを分析する意義について、在日コリアン女性を対象としたジェンダー研究の知見から論じる。続いて、本論の分析枠組みであるシンボリック相互作用論(Symbolic

---

た結果、相対的に『民族性』を保持し得たという評価が可能だとしても、その代償は戦後も含めてあまりにも大きかった」(金富子 2011:53)と痛烈に批判している。こうした現象について、上野(1996)は差別の間に「政治的な優先順位」(上野 1996:208)がつけられるためであるとし、複数の差別、すなわち<複合差別>のあいだの関係を個人によって「生きられた経験」(上野 1996:230)として捉えることの重要性を指摘している。

Interactionism、以下 SI とする) の基本的な観点を踏まえた上で、ジェンダーと民族などの社会的要素を区分せずに分析することの有用性を確認する。SI は民族やジェンダーをシンボル (記号) として人々が生み出す意味、すなわちディスコースへの着目を喚起した。一方で、研究の進展によりディスコースの定義や方法論は様々な流派に枝分かれしている。そこで、本論で依拠するディスコースとパワーの概念についてジェンダー研究の議論の中から紹介する。

### 1. 在日コリアン女性をめぐるジェンダー研究

在日コリアン女性のジェンダーに関連する研究を概観すると、民族／女性運動、文芸・映像文化活動、個人史の3つに大別することができる。徐 (2012) は在日コリアン女性による運動について、<民族組織からの自律性>と<ジェンダー役割からの自律性>という二軸を設定し、分析枠組みを提示した。解放直後は、男性が主導の民族運動や政治運動の下部組織として発展した「良妻賢母的民族運動」が主であったが、1960年代以降「個人の自発性に基づく小規模かつ水平的なネットワーク型の運動」(徐 2012:88) へと広がり帯びていく。そこには運動の個別化と多様化が見いだされる。

こうした民族／女性運動の発展を支えた要因のひとつとして、徐 (2012) は運動を

担う二世以降世代の日本語の運用能力を挙げている。日本語の運用能力を契機に大きな展開を迎えたという意味において、在日朝鮮人女性文学も共通している。もっぱら在日コリアン男性によって描かれる存在であった一世女性は<支える>あるいは<耐える>存在であった (金壠我 2004)。在日女性作家の作品が現れるようになったのが1970年代、その作品が社会的な注目を集めるようになったのは1980年代という。さらに金壠我 (2004) は、1970年代以降、時代を追うごとに女性作家による女性の描かれ方に個別化と多様化が見られるようになると分析する。妻や母親という役割から女性を描くのではなく、一人の人間として描かれることに「女性の生き方の転換」(金壠我 2004:241) が認められるという<sup>6</sup>。もともと在日朝鮮人文学には私小説的な特徴が兼ね備えられていたが、「個々の生き方の中心に民族ではない『私』が据えられる」(金壠我 2004:245)ことは、今後も予見される。

在日コリアンを民族ありきではなく「個人」として見ることを重視する傾向は、研究者といえども一般化や類型化をあえてせず、個人史として記録する営みの蓄積にも通じていよう<sup>7</sup>。これらは編者が在日コリアンという枠組みを無きものとしているのではなく、ひとりの人間である「個」の部分を前景化する試みである。そうした作品を

6 在日コリアン女性としての生き方を真っ向から取り上げた二世女性の作品として成 (1995) を挙げておく。

7 最近刊行されたものとしては小熊・姜 (2008)、小熊・高・高 (2016) がある。女性に限定しているものに福岡・辻山 (1991)、かわさきのハルモニ・ハラボジと結ぶ 2000 人ネットワーク生活史聞き書き編集委員会 (2009) などがある。

通して、在日コリアンの生を記録するだけでなく、日本に暮らす在日コリアン、ひいては日本の中の多様性とどう向き合うべきかを読者に問うことも志向している。

在日コリアンや女性として括ることがそもそも適当かについても見直しを迫るような、多様性、個別化を指摘する論考がある一方で、表象としての在日コリアン女性の描かれ方に硬直化が見られるとの指摘もある。梁仁實(2003)は「朝鮮の儒教の影響の上に、日本の『近代的家父長制』が影響し、二重の構造を作り出している」(梁仁實2003:46)とされる在日コリアン女性をとりまくジェンダー編成について、日本映画における「在日」女性表象の分析を通して考察している。そこには、「チマチョゴリ」や「オモニ(母)」に凝集され繰り返し表象される「在日」女性の像が見いだされる。この現象について、梁仁實(2003)は、朝鮮半島の儒教的影響よりもむしろ、日本の家父長制の影響を強く受け、現在もなお戦前からの連続性が認められると考察した。

以上の先行研究の概観を通して、在日コリアン女性を取り巻くジェンダー規範については、朝鮮半島からの影響、日本社会に流通しているジェンダー規範、在日コリアン女性達によって模索・提案されてきた観点とが、どのように関連し合っているかについて、丁寧に事例を積み上げていく必要があると言えよう。

## 2. シンボリック相互作用論(SI)

ジョージ・H・ミード(George H. Mead)は人々が言語ないしは発話によって行う意味生成と行為に注目し、<民族>をディスコ

ースの中で産出されるものと捉えた(Mead 1934)。人々は単に出来事を経験するのではなく、出来事の意味づけを通して社会的な現実を構築する。ミードを参照し、ハーバート・ブルーマー(Herbert Blumer)は、<黒人/白人>という人種概念も個人のアイデンティティや社会的位置づけを具体化するためのシンボルとして用いられていることに注目した(Blumer 1963)。<民族>や<人種>は単体として存在するのではなく、階層や職業、教育などと分かちがたく結びついて存在すると指摘する。

こうした知見から SI を理論化したハーバート・ブルーマー(Herbert Blumer)は、SIの理論的基盤に、①行動の中核に意味があること、②意味特性は言語によって交渉可能であること、③思考が解釈を変容させることの三点を掲げた(Blumer 1969)。SIは個人レベルの語り、相互作用における意味づけに注目しながら、そこに表出する<一般化された他者>が、語り手のアイデンティティや社会的立場とどう結びつけられたり切り離されたりするかといった側面に、その個人が属す社会的現実を見ようとする観点であるとまとめられよう(Mead 1934, Blumer 1969)。

人種や民族をめぐるディスコース研究を中心に発展してきたSIだが、基点からその他の社会変数との関連を射程範囲に収めてきたため、ジェンダー研究との親和性も高かった。そしてSIを援用するジェンダー研究は、<社会的現実の中にある個人>に接近するために、ジェンダーが、民族、階層、職業、教育などの語りといかに結びつけら

れているかに注目してきた (Gallant 2014)。特にジェンダー観は、職業選択や職場内での地位と深く結びついているため、女性の社会移動を視野に入れた研究において SI の有用性が指摘されている (Lucas and Steimel 2009)。また、民族差別にせよ性差別にせよ、社会問題に貢献しようとする研究は、抑圧的なパワー構造の是正といった向かうべき方向性が所与であるが故に研究者の主観に偏る危険性がつきものとなる。調査参加者の言語使用の中に意味づけを見だしていく SI は、研究者の客観性を担保する上でも有用であると指摘されている (Kleinman and Kolb 2011)。

### 3. ディスコースおよびパワー関係

SI において、ディスコースへの注目は理論の中心であるが、その後のディスコース研究の広がりにより、ディスコースの定義も多様になってきている。そこで本論で依拠するディスコース分析およびパワーの概念について整理をしておく。

ミッシェル・レイザーとチェリス・クレイマリー (Michelle Lazar and Cheri Kramarae) は、ジェンダー、パワー、ディスコースは密接に絡み合いながら発達してきた概念であると言う (Lazar and Kramarae 2011)。1980 年代までのジェンダー研究では、固定化されたジェンダーステレオタイプが生み出す社会的不平等の描出と改善に関心を寄せてきた。そこでは相対的に、メ

ディアや政治家など、社会的に権威を持つ人々のジェンダー観に関心が寄せられ、暗黙のうちに社会に定着しているジェンダー規範をあぶり出すことに注力してきた。いわば、静的なジェンダー観を前提としていたと言える。言語との関係で言えば、男性優位であったり、男性を無標－女性を有標とする語彙の存在<sup>8</sup>などでもって、我々が性別による不均衡が所与の社会に生きていることの証左とされた (cf. 中村 2001)。

語用論をはじめ、社会言語学分野を中心にディスコースという概念が活発に議論され、社会学、人類学、政治学などで広く採用されてきた。テウン・ヴァンダイク (Teun Van Dijk) はディスコースという概念の 10 にわたる構成要素を整理しているが (Van Dijk 2011)、その共通項として「社会的相互作用の形式」(Van Dijk 2011: 3)と定義付けている。続けて「話したり書いたりすることで言語使用者は、意味を帯びた社会的に適切な相互作用として、あらゆる社会的行為を達成したり、達成させるために人々と調整したりする」(Van Dijk 2011: 3、筆者訳)と言う。すなわち我々は所与の言語を用いるだけではなく、我々が様々な言語使用によって意味を作り出し、了承したり、撤回したりといった<ディスコース実践>に取り組む存在となる。いわば、言語による<行為遂行性>に研究の焦点が移行したのである。

この観点をジェンダーに当てはめると、

8 日本語を例とすれば、前者は、夫婦を「主人」(男性)と「家内」(女性)と呼び分けること。後者は「女医」というように女性であることを明示(有標)することから、無標の「医者」は男性を前提としている、といった例など。

人々はディスコース実践によって、ジェンダーの概念や意味を作り出す存在となる。しかし、現実には誰もが自由に言語を駆使して概念を産出したり、交渉できるわけではなく、多かれ少なかれ制約を受ける。相互了解を達成するためには、我々は既存の言語使用に準拠せねばならない (Lazar and Kramarae 2011)。

意味生成における制約は言語によるものだけではない。意味生成や相互了解を達成しやすい相手や場面というものがある。その偏在を説明する概念がパワーである。ミッシェル・レイザーとチェリス・クレイマラー (Michelle Lazar and Cheris Kramarae) がジェンダー、パワー、ディスコースの概念が密接であると言うのは、こうした三者の関係性に基づいている (Lazar and Kramarae 2011)。人々がどのようなジェンダー観の中で生活しているのかを紐解くためには、それぞれの状況や場面 (コンテキスト) においてジェンダーに係わるディスコースの交渉や調整がどのように行われているのかに着目する必要がある。日常のディスコースに行為遂行性が解き放たれたり、制約されたりする契機や原因を探求していくことで、より社会的公正に近づくための手がかりが得られる。

### III. 研究方法と事例概要

#### 1. 研究方法

先行研究を通して、在日コリアン二世女性は民族とジェンダーの複合的な抑圧の中で自らの社会的立場を模索してきたことが

指摘されている。その模索を通して、多様性と個別性が強調されてきた。多様性と個別性の強調は、一方で連帯することの難しさも提示した。他方で、表象として流通する在日コリアン女性のイメージには戦前から現在まで変わることなく温存されてきたとの指摘もある。在日コリアン女性の二世以降世代の個人の来し方に注目した個人史にも蓄積がなされつつあるが、その個人の語り方の中で民族やジェンダーがどのようにディスコース資源として用いられているのかについて丁寧に分析した研究は管見の限り限られたものとなっている。そこで、本論では、あらゆる社会変数を切り離さないことを提唱した SI に依拠し、在日コリアン二世女性のライフストーリーをもとに記号論的なディスコース分析に取り組む。

筆者らを含む共同研究プロジェクトでは、2014年から2017年にかけて13人の在日コリアン二世を対象としたライフストーリー・インタビューを行った。研究チームは在日コリアンの人類学者、日本人の社会学者、日本人の社会言語学者 (猿橋)、ジェンダー研究者の韓国人 (柳) で編成された。全員、在日コリアン研究に携わった経験をもち、その経験から縁故法を用いてインタビュー参加者を募った。インタビュー参加者は関西在住が7名、関東在住が3名、四国在住が3名である。生年は1930年から1960年と広い<sup>9</sup>。女性は10名、男性は3名であった。ライフストーリーは両親の渡日の経緯から、幼少期、青年期、就職、結婚、出産、育児、現在の暮らしまで、それぞれ

9 インタビュー調査の全容と詳細は猿橋 (2018) を参照のこと。

の人生の足跡に沿って緩やかに語ってもらった。

インタビュー項目に「差別経験」を組み込んではいなかったが、差別経験はほとんどの人の語りに含まれた。差別の語りは民族、性、病、障害、老いと広きにわたったが、自分自身の経験と直結するところでは女性の方が被差別経験を多く語る傾向があった。その中から、本論では民族差別・性差別・職業差別が関連しあっている語りが認められた韓希淑(ハン・ヒスク)さん(仮名)に注目して分析を行う。希淑さんは民族に関連する活動に参加することもあり、活動を担う人々と親交を持っているが、「私は何かを声高に主張したいとかはないんです。普通に暮らしたいだけです」と繰り返していた<sup>10</sup>。希淑さんは特定の団体の声を代弁しようとはしておらず、その点も希淑さんの語りに注目する手がかりとなった。

なお、ディスコース分析における着目点として、語り手が持つ知とパワーの関連性を明らかにするという本稿の主眼から、ジークフリート・イエーガーとフローレンタイン・メイヤー(Siegfried Jäger and Florentine Maier)による、言語的に遂行されたディスコース実践(linguistically performed discursive practices, Jäger and Maier 2015: 114)の分析項目を参照した。具体的にはどのような人間像を前提とし、伝えているかとい

ったイデオロギー的な内容に加え、直示、含意、象徴・比喩などの修辭的戦略、二つのテーマの結合部などにおける論証ストラテジー、登場人物と依拠する情報源の位置づけなどに注目して分析を行った。

本稿の主眼は、希淑さんというひとりの在日コリアン二世女性の中の民族やジェンダーのつながりと、その変容を見ていくことを目的としている。そのため、希淑さんの経験が同時代を生きた在日コリアン女性全体に一般化できるかどうかを検討することは本稿の目的ではない。しかし、先行研究で希淑さんの経験が同時代・同地域の在日コリアンに通じると類推される部分については脚注にその旨を記載することとする。

## 2. 事例概要

本論で紹介する希淑さんは1949年に大阪府内の在日コリアン集住地域に4男4女の6番目に次女として生まれた。第1回のインタビュー時点<sup>11</sup>(2014年9月)で65歳だった。父と母は済州島の出身で渡日後に出会い結婚した。希淑さんは中学卒業(1964年)後、洋裁学校に通い自宅で洋裁の仕事をしていた。25歳の時(1974年)、在日コリアン男性と結婚し、3女1男を出産した。1980年代末から14年間、大阪府設置の在日コリアンの児童生徒のための民族学級に保護者として関わった。末子が高校に進学するとき(1990年代末頃)、希淑さんも通信

10 希淑さんが10代(1960年代)の頃、両親は民族団体の活動に参加していたし、1910年生まれのもう一人の母親は晩年、夜間中学で学んでいたというが、活動や運動の内容について希淑さんは両親から具体的に聞いたことはないという。

11 インタビューは2回目を2017年2月、内容確認のため2018年3月に実施した。総インタビュー時間は7時間強となった。



制高校に入学し、卒業後、大学へも進学した。2003年から現在に至るまで、学校向けに、韓国・朝鮮の教材・教具を調達・販売する自営業をしている<sup>12</sup>。

#### IV. 分析

以下、韓希淑さんの語りを3節に分けて分析する。IV.1節では複合的な差別経験の語りを分析する。続くIV.2節では、父と母が持つ技能や能力をジェンダーと関連付ける語りを分析する。最後のIV.3節では、希淑さんの現在の職業についての語りに注目する。ここでは、IV.1節と2節で見られたジェンダー観から脱却している。何がそうさせたのかの分析・考察はV章で行う。

##### 1. 複合的な差別の語り

希淑さんのインタビューの中で差別について言及した語りが3場面あった。それらは女性差別と民族差別の両者を含むものであった。

ひとつ目は「母親の記憶で印象的なことは何か」という問いに対する語りである。子どもの頃、近所の日本人に差別されたことを母に話した時のエピソードが思い出された。

【抜粋 1】近所の日本の子に通せんぼされて、それをオモニ(母)に言ったんです。そうしたら「悲しむことない。今度その子をじっとみてごらん、どんな顔をしているか、どんな服を着ているか。どんなにきれいな服を着ていても、その子には崩れたところがある」って。「差別をするのは、こっ

ちに問題があるんじゃないくて、その子にダメなところがあるんだ」って言いましたね。それでオモニがされた差別の話もしてくれました。(戦時中の食料)配給の時に、決まって日本の女の人で朝鮮人に対して半分腐りかけのものをくれたり。お米も(量る)升に親指をぐっと入れて朝鮮人には少なくてか、そんな話をしてくれました。

娘から日本人に嫌がらせをされた話を聞いた母は、差別に対峙する術と考え方、母もかつて同じように地域の日本人女性から受けた差別の経験を話した。母も同じような差別経験があったと知ること、幼い希淑さんは「自分に非があるのではない」という思いを強く持つことができたであろう。同時に、この語りは家族が暮らす地域に、日本人の朝鮮人に対する民族差別が植民地期から1950年代を通して存在していたことを伝えている。

また、母が提案した対処策は、差別した「相手をよく見る」という術であった。睨み返すというような、攻撃に対する反撃として送る視線ではなく、いわば<観察の視線>を送ることである。面と向かって受ける差別は屈辱的なため、毅然と相手を見返すことは難しいだろう。かといって、うつむいてしまったら差別に屈することになる。<観察の視線>を送るという提案は、抑圧される側の少女が取り得る対抗措置として実行可能と考えられる。

次に差別についての語りが見られたのは、「両親からいつも言われていたことは何か」

12 調査協力者のプロフィールはプライバシーに配慮し、分析に抵触しない範囲で修正している。

という問いに続く語りにおいてである。

**【抜粋 2】** アボジ(父)とオモニは考え方が合わないんです。アボジは羽振りがよくなるとぐっと上向いて歩くような人で、オモニはそれはダメって言っていました。アボジには一世の男性特有の差別意識がある。済州島の海女さんに対してだとか、あとキーセン(妓生)とかものすごく嫌う。私、小さい時からチャンゴ(朝鮮半島の打楽器)といったらアボジが怒っているとこしか見てないから、チャンゴは悪いものと思ってました。その後でオモニは「お父さんはあんなこと言っているけど、キーセンという仕事は誰にでもできるもんじゃないねんで、頭も良くないとだめだし、行儀もよくないとだめだし、チャンゴだけじゃなくて歌や踊りも一流でないとキーセンにはなれない」って。アボジとオモニからはいつも反対のことを聞かされていました。

父と母の考え方が異なるという話から、父の、女性が就く特定の職業(海女とキーセン)に対する差別意識が語られている。父はチャンゴからキーセンを連想して嫌っていた<sup>13</sup>。そのため、幼い希淑さんもチャンゴに否定的なイメージを抱くことになった。明言はされていないが、父と母の相対立する見解をめぐる語りの中で、希淑さんは常に母を支持している様子がかがえる。

ジェンダーバイアスに基づく職業差別は

男女にかかわらず持ちうるが、ここで希淑さんは父の差別意識を「(在日コリアン)一世男性に特有の視点」と、在日コリアン社会に存在する観点として一般化している。また、父の、女性が就く特定の職業に対する差別意識は、「羽振りが良くなると上を向いて歩く」父の行動様式と関連して想起されている。これは、言い換えれば経済的な成功に優越感を持ち、それを態度に表出することである。経済的・職業的な位置づけを優劣関係で捉えるという点で、父のこの二つの観点は連動している。

希淑さんが語る母は、父のこの行動様式や価値観を否定する。経済的な成功への優位性を表出させることに対しては、単に「それはダメ」と一蹴する。キーセンへの職業差別については求められる能力や技能の高さを根拠に蔑視を退けている。ただし、母は考え方や行動規範の異なる夫に対し直接批判したりはしない。夫のいないところで、夫の価値観や行動様式の影響をうけかねない子どもに対して根拠を示して却下することで対処している。差別に直接関与せず、相手を客観視することで無効化を試みるという点で、抜粋 1 と抜粋 2 の対処策には共通点が見出される。

差別を含む最後の語りは、家の経済状況についての語りから派生した。

**【抜粋 3】** 私は中学までなんです<sup>14</sup>、それが

13 「キーセン」と蔑視の観点で言うと、1970年代の日本人男性によるいわゆる「キーセン観光」(宋連玉 2005)との関連が連想されるかもしれないが、1950年代のやりとりと考えられるため、関連はないものと推察される。

14 在日コリアンの統計はないが、希淑さんが中学校を卒業した1965年の高校進学率は日本全体で70.7%、

悔しくて大人になってから通信（高校）行きました<sup>15</sup>。姉は中学も最後まで行けなかった。妹は私が「高校に行かせてやって」って親に言いました。私は勉強が好きで高校に行きたかった。担任の先生が「親に言ってあげようか」って言ったんですけど「絶対にそれはやめて」って。15歳の私が思ったことですけど、兄達はよく「日本の社会に差別がある」と言うけれど、私からしたら家の中に差別があるじゃないかって。あきらめきれずにラジオの英語講座でずっと勉強しました。

希淑さんは通信制高校を卒業した後、大学にも進学した。途中で続けられなくなってしまったため最終学歴は大学中退である。しかし、家の経済状況を語るなかで、言い放つように「私は中学までなんです」と学歴の話に転じた。大人になってから学び直すことができたとはいえ、中学卒業時に高校進学を諦めねばならなかった悔しさを表現した。

希淑さんはこの語りの中で「女性差別」という言葉こそ使っていないものの、きょうだいの中で女性だけが進学を諦めねばな

らなかったこと、そのことに気付いていない兄の存在を語っており、この「家の中の差別」（下線部）が女性差別であることは明確である。兄達は日本社会の韓国・朝鮮人に対する民族差別を批判する。その民族差別は抜粋1で見たとおり、希淑さんも母も実際に経験している。希淑さんの来し方の振り返りの主観的意味世界において、家の外には日本社会からの民族差別（抜粋1）があり、在日コリアン社会にはジェンダーに関連した職業差別意識（抜粋2）があり、家の中には男女差別がある（抜粋3）。希淑さんが複合的な差別の中に置かれていたという彼女自身の認識が読み取れる<sup>16</sup>。

抜粋1、2と同様、抜粋3の「家の中の差別」に対しても、希淑さんは異議申し立てをしない。担任の先生が仲介に入ることを申し出たが、「絶対にやめて」と制した。数年後、妹の進学を親に頼んだことが唯一の直接的な関与である。希淑さんは女であるがゆえに進学を諦めなければならなかったことを忸怩たる思いで受け入れ、仕事をしながらラジオ講座や読書で学びを続けたのである。

---

大阪府はそれより高く77.7%である。男女差は2ポイント女性が低いが、日本社会全体としては大きな男女間格差は見られない（文部科学省 1966）。希淑さんの生まれ育った地域に詳しい在日コリアンの研究者によると、この頃までは「女の子は中学校を卒業していれば良い方」との考えが広くあったが、1970年代にかけて「女子でも高校進学させたい」という考え方が急速に広まっていく時期でもあり、過渡期であったとのことである。

15 希淑さんは40歳を過ぎて、末子が中学校を卒業したことで「子育てがひと段落ついた」と思い、自らの高校進学を決めた。クラスメイトは様々な事情で高校に通えなくなった若者が中心だったが、希淑さんと同年代で、希淑さんと同じように家庭の経済的事情等で学齢期に進学できなかった日本人にも在日コリアンにも出会ったと言う。

16 「日本社会にも性差別があったはずでは」との指摘を受けるところかもしれないが、希淑さんの今回のインタビューではそれに関連する語りはなかったことを付記しておく。

## 2. 女性差別に対抗するディスコース

抜粋2で、父は「在日コリアン一世男性に特有」の差別意識を持ち、その父といつても反対の意見を持つ母が対照的に語られた。父が「男性特有」ならば、母は「女性特有」の面を持っているのだろうか。実際、希淑さんの語りの中で、父については<経済的成功>、<職業上の地位>、<怒り>など、母は<養育や世話>、<人間関係>、<慰め>など、ジェンダー研究で分類されるところの男性性、女性性をそれぞれ象徴するような事柄 (Walkerdine et al. 2001) が多かった。母の思い出を語る上で、女性であることと直接結びつけられた語りの例が以下である。

【抜粋4】(母は)花の名前をよく知っています。友達のお母さん、日本の人ですけどね、私が小学生の時に「女の子は花の名前をたくさん知っておくといいよ」って言われた記憶があります。それを私が引き継いだみたいで花を育てるのが好きです。

ここでは、母が好きなものを希淑さんも好きだという母娘間の継承に加え、それが日本社会においても女性が持つておくといふ一面として承認されたことで、その意味が深められていると見て取れる。

続いて、希淑さんの母は花だけでなく、向き合う人や物事ひとつひとつに丁寧であることが語られた。そのような母の性質や能力は抜粋4で示唆されたように、女性であることと関係しているのかと聞き手が問うたとき、希淑さんはそれを却下し、女性であることよりも「人として」あるべき姿

であると位置付けた。その語りが以下である。

【抜粋5】聞き手：それ(生活が丁寧なのは)女性としてそうありなさいという？

希淑：女だからというよりは、人としての方が強かった。人の悪口を言わない。汚いところをきれいにすると良い子が産まれるとか言われましたね。トイレとか汚いところこそ掃除を嫌がらずにやりなさい、という意味でしょう。

人の悪口を言わないことを美德としたり、因果応報といった考え方は、性別に関係なく人が持つ価値観として頷ける。そこに続く、掃除と出産の関連付けは女性性との関連も深いように見える。しかし、希淑さんは「普通なら嫌がる仕事を嫌がらずにやる」という意味に置き換え、それも含めて「人として」あるべき姿を説き、実践する母を語っている。

続いて、父と母の間のパワー関係を転換させる語りの例として、両親が地域コミュニティの承認を受けるエピソードの語りを紹介する。

【抜粋6】オモニは人に対して丁寧。日本の近所のおばちゃん達も困ったら相談に来て慕われていましたね。「おかあちゃん」って日本の人からも呼ばれて。アボジは字が達筆で、文字もよく知っている。その当時は手紙も書けない人も多かったでしょ。だからそういう面で困った人が訪ねて来ていました。

短い語りの中に父と母の対照的な位置づけが認められる。人の悪口を言わず、ひとりひとりに丁寧に向き合う母は、地域の人々の良き相談役であった。「日本の近所のおばちゃん達も」相談に来たという。追加の副助詞「も」から、「在日コリアンに加えて日本人も」と読み取れる。一方、父は読み書きのスキルによって地域の人から必要とされていた。明示されていないが、地域で手紙を書く上で父の助けを必要としていたのは在日コリアンと考えられよう。ここに在日コリアン社会に承認される父と、在日コリアンと日本人を含んだ地域社会に承認されている母の位置づけが確認される。

### 3. 現在の職業をめぐるディスコース

希淑さんにとって複合的な差別がもたらした最大の不利益は進学をあきらめざるを得なかったことである(抜粋3)。それでは、希淑さんが「諦めきれず」に遠回りをして取り返した学び(知識、技能、スキルなどのすべて)は、パワー関係転換のためのディスコース実践とどのような関係にあるのだろうか。この疑問に迫るために、現在の仕事をめぐる語りの中で、知識やスキルがどのように意味づけられ、そこにジェンダー観がどう関連しているかを見ていくこととする。

希淑さんは中学卒業と共に働き始める。以来ずっと家で仕立ての仕事をしてきた。出産をきっかけに子どもをどう育てるべき

かという課題に直面した。その語りは希淑さんの幼少期を改めて振り返らせるものとなった。

【抜粋 7】子どもの頃は自分が朝鮮人っていうことが嫌で嫌でしょうがなかったんです。……進学できなかったこととか全部含めて良いことなんか何もない。そこから抜け出すために本ばかり読んで、そんな子どもだったんです。結婚して、子どもを持った時、私のような子に育てたらダメやと思ったんです。かと言って知識もないし、言葉も分からない。もう何もない。そんな時に子どもが通う学校に民族学級ができました<sup>17</sup>。私は本当に嬉しかった。

希淑さんは在日コリアン社会、ひいては家庭にある男女差別によって進学できなかったと捉え、朝鮮人であることを嫌悪してきた。それに抗うために独学で学び、読書から知識を得た。しかし、出産を機に、そんな自分を明確に否定している。自分自身について「何もない」(下線部)と表現している。民族学級はそんな希淑さんの欠落を補ってくれる存在となった。子どもが民族学級で学ぶのと並行して、希淑さんも民族学級の保護者会で民族の歴史や文化について学ぶようになる。それは4人の子どもが小学校に通う14年間に及んだ。

2003年から現在に至るまで、希淑さんは民族学級で必要となる韓国・朝鮮の教材・

17 政府による民族学校閉鎖により起きた阪神教育闘争(1948年)をきっかけに大阪府によって代替措置として設置された、いわゆる「覚書民族学級」(梁陽日 2003)の一角に位置づけられる。在日コリアン在籍児童分布の変化によって1980年代の終わりに希淑さんの子どもが通う学校に移設されたという経緯があった(当時の民族講師からの聞き取り)。

教具を調達する仕事を自営で行っている。それは民族学級の保護者会の仲間に勧められて始めた新しいビジネスだった。その経緯を以下のように語った。

【抜粋 8】 商売経験は全然ないんですけど、バブルが崩壊（1991～）して先のことを考えるじゃないですか。それで、やってみようと思って始めたんです。パソコンは高校で教えてもらったので運が良かった……それから、私は言葉が全然できなかつたんです。で、5年間、韓国語教室に通いました。必要に迫られて、メールしたり、電話かけたり。苦情が言えた時に、あ、できるようになってると思いました。

商売経験を持たなかつた希淑さんが、民族学級に出会い、「親の民族学級」と称する保護者会で韓国・朝鮮について学び、今は、韓国・朝鮮の文化を広く知ってもらうための教材調達を生業としている。通信制高校で学んだパソコンスキルが思いがけず役立っている。「必要に迫られて」学んだ韓国語は韓国の取引先に苦情を言えるまでになった。韓国・朝鮮から調達したものは、教育現場で問題なく使えるのかという質問に対しては以下のように答えた。

【抜粋 9】 パジチョゴリ（男性用の韓服）、子ども達がサムルノリ<sup>18</sup>する時、踊りながら走り回るんですけど、脚絆のようなものを足にくくるんです。それが踊っている間にずれてくる。上にゴムでも入っていたらいいのって聞いて、じゃあゴム入りのを

作りますって、洋裁も役に立って。

子どもを出産した時、「何もない」と自己効力を否定した希淑さんが、現在の仕事では過去に培ったあらゆる能力やスキルを駆使している様子が語られた。通信制高校で学んだパソコンスキルはもちろんのこと、進学を断念して身につけた洋裁のスキルも活かされている。周りの助けも借りながら、これまで学んだことを活かしつつ、新たに語学を学び、ビジネスを成り立たせている。

## V. 考察

抜粋 8、9 の希淑さんの現在の仕事の語りにおいて、知識や能力がどのように扱われているかについて、以前に紹介した語りも振り返りながら考察していく。

希淑さんは中学を卒業するとき、高校進学を渴望した。しかし、進学は家の経済的な事情と性差別によって叶えられなかつた。日本社会と在日コリアン社会にまたがる複合的な差別を認識しながら、「朝鮮人に生まれて何も良いことなんてない」と自身のルーツを否定した希淑さんは、叶えられなかつた学びを、本を読み、ラジオ講座で学び続けることで埋めた。洋裁学校で手に職もつけた。しかし、子育てをする段になり希淑さんは「自分には何もない」と失望したと言う。では、渴望し、諦めきれずに身につけた知識や技能は、どこへ行ってしまったのだろうか。

その答えの手がかりが、IV.2 節で見た家の中の男女差別を転換する希淑さんのデイ

18 伝統的な打楽器を使った合奏。

スコースに垣間見える。父は韓国語と日本語の二言語に達者かつ達筆であったため、植民地期には日本企業で役職にも就いていた。戦後、起業した会社は経営がうまくいかななくなることもあったが、読み書き能力によって地域の在日コリアンに頼られる存在でもあった。しかし、そのような社会的、経済的成功を達成させる父には「在日コリアン一世の男性」に特有の女性差別、職業差別意識があった。そのパワー構造を転換させる上で、希淑さんは母が持つ、人に丁寧に向き合い、親身に世話を焼く能力について、女性らしさという位置づけを却下し、<人間>としての美德として位置づけた。

知識や技能は役に立つことはあっても、人からの篤い信頼を得ることはできない。ましてや知識や技能を持っていること、それで得た経済的成功に優越感を持ち、それが欠けている人を見下すようでは<人間>として「ダメ」だということは母の教えであった。希淑さんの知の渴望は、朝鮮人に生まれたことを否定することと表裏一体でもあった。自分の出自の否定を原動力に得た知識が子育てで通用するはずがない。このような知に対する観念を潜在的に持っていたからこそ、子育てを前に、自分がこれまで必死に蓄積してきた知識や技能では「何もない」ことと同義に映ったと考えられるのではないのか。

転じて、希淑さんは、民族学級の保護者会で民族的なアイデンティティを育み直す機会に恵まれたことを語った。そして、その延長線上に始めた仕事で、母に学んだ人や物に<丁寧に向き合う姿勢>と、父の実

践に見、自身は学齢期にその機会から排除されたものの、時間をかけて粘り強く獲得した<知識と技能>の融合を達成させたと見ることができるのではないか。そこには語学力、パソコンスキル、使用者の要望を丁寧に聞く姿勢、洋裁技術など、これまで希淑さんが獲得してきた知識やスキル、姿勢や学びへの意欲などが総動員されている。それぞれの能力の間に優劣やジェンダー化された視点の語りは見られない。

さらに、語りの中で承認のために動員される視座について検討しておきたい。家庭内の男性優位/女性劣位のパワー関係を転換させる上で、それを承認する存在として動員されたのは<日本人>であった。民族差別という文脈では加害者側に位置付けられる存在を動員することは、パワー関係を調整する際によく見られるディスコース実践でもある (Lucas and Steimel 2009)。しかし、抜粋8で希淑さんが取引先である韓国企業との関係で語ったところは、相手からの評価ではなく、希淑さん自身が「できるようになってる」と自己承認をしたという語りになっている。両場面で大きく異なるのは<民族的アイデンティティ確立>の有無である。民族的アイデンティティを確立した希淑さんは、他者の権威やコミュニティからの承認を動員する必要がなくなり、継続して培った能力やスキルについて自分で自分を承認する語りを引き出したと言えるのではなかろうか。地道に継続する学びは希淑さんの人生を通して一貫しているが、民族的アイデンティティの確立をきっかけに<自ら求める学び>から<他者のために

役立つ学び>への推移も確認される。

## VI. 結論と今後の展望

最後に、IV.1 からIV.3 の3節にわたる語りのディスコース分析を通して、語り手が何を遂行したのかをまとめて本論の結論とする。

IV.1 節では、韓希淑さんを取り巻く複合的な差別の語りを確認した。IV.2 節で両親の能力について、<男性対女性>という対置関係を取らず、<男性対人間>という観点を持ち込むことで、性差別をもたらす力関係の是正が試みられていることが確認された。しかし、インタビューという限られた場におけるディスコース実践だけでは、社会に存在する男女差別の是正にインパクトを与えるまでには至りにくいと言える。

なぜなら、ひとつにはインタビューという場面が関係している。通常、インタビューという場面では、聞き手は語り手の自由な位置取りを妨げない。特にライフストーリー・インタビューは語り手の意味世界に接近するために語り手の自由な展開を励ます手法である(桜井・小林 2005)。しかし、語り手の日常は、帰属する組織や集団、新聞やテレビなどのメディアが発するジェンダー観や民族観に晒されている(Denzin 2001)。日常場面では独自のジェンダー観を展開する自由度は相対的に低くなることが予測される。それがジェンダー差別や民族差別をめぐる社会構造から個人が容易に解

放され得ない要因でもある(Lazar and Kramarae 2011)。

しかし、IV.3 節で紹介した語り手が、前の2節と大きく異なる点は、希淑さんの現在の職業が、民族差別を是正する社会活動に直接貢献するという点である。民族学級に教材を調達するということは、民族差別是正に貢献する具体的な行動と言える。その語りの中で、差別に対抗するための知識や、何の役にも立たない技能といった、知識・技能間の優劣関係は現れず、よりよい仕事をするために相互補完する能力・スキルとして描き出されている。この転換を生み出したものは、「民族学級の保護者会」で滋養した民族的アイデンティティの肯定、それを礎にした他者のための学び、自身の能力が高まっていることについての自己評価の過程にあると分析した。ここで付言しておくべきことは、語りの中では民族的アイデンティティの確立と学びをめぐる語り景化されているが、その仕事でもって韓希淑さんが経済的に自立しているということをお忘れてはならない<sup>19</sup>。

本論には限界、今後取り組むべき課題もある。まず、ひとりの事例しか分析していないという点である。彼女の語りを在日コリアン二世女性全体に一般化することはできない。さらに、本論で展開したSIを用いた分析は、個人の語りの転換を説明するが、それが社会構造の変化といかに結びついていくかまでには到達していない。希淑さん

19 希淑さんの仕事の語りからは実践共同体(Wenger 1999)に重なる様子がうかがえる。実践共同体は、個々のディスコース実践だけでは達成し得ない社会変革を実現する手法として注目されている(Paechter 2006)。



の語りは、民族アイデンティティの再定義をするきっかけとなった民族学級の保護者会への関与が1980年代後半から1990年代にかけてであり、運動の個別化や水平化の機運と同時代性を持つ。社会構造と個人の

語りの接合については、メディアや教育といったより広範かつ公的な場面のディスコースの分析もあわせて、接点や循環の有無を見ていく余地が残されている。

## 付記

本研究にご参加くださった調査参加者の皆さまに心から感謝申し上げます。また、草稿の段階でアドバイスをくださった高正子さん、橋本みゆきさん、投稿後に貴重なご指摘をくださった査読の先生方、編集の労を担ってくださった編集委員会の諸先生方に感謝申し上げます。本研究はJSPS科研費、基盤研究(C)「在日韓国・朝鮮人一世から二世への生活文化の形成および世代間継承の研究」(課題番号26380727)の助成を受けています。

## 参考文献

- Belenky, Mary Field, Blythe McVicher Clinchy, Nancy Rule Goldberger and Jill Mattuck Tarule, 1986, *Women's Ways of Knowing*. Basic Books.
- Blumer, Herbert, 1963, "The Future of the Color Line", In John. C. McKinney and Edgar. G. Thompson eds., *The South in Continuity and Change*, Durham, NC, Duke University Press, pp. 322-336.
- 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Englewood Cliffs, NJ, Prentice-Hall.
- Denzin, Norman, 2001, *Reading Race: Hollywood and the Cinema of Racial Violence*, London, Sage.
- かわさきのハルモニ・ハラボジと結ぶ 2000 人ネットワーク生活史聞き書き編集委員会編, 2009, 『在日コリアン女性 20 人の軌跡——国境を越え、私はこうして生きてきた』明石書店.
- 皇甫康子, 1998, 「在日朝鮮人女性である私にとっての「慰安婦」問題」『女性学連続講演会』2 巻: pp.26-37.
- 福岡安則・金明秀, 1997, 『在日韓国人青年の生活と意識』東京大学出版会.
- 福岡安則・辻山ゆき子, 1991, 『ほんとうの私を求めて——「在日」二世三世の女性たち』新幹社.
- Gallant, Andrea, 2014, "Symbolic Interactions and the Development of Women Leaders in Higher Education", *Gender, Work and Organization*, 21(3): pp. 203-216.
- Heilman, Madeline E., 2001, "Description and Prescription: How Gender Stereotypes Prevent Women's Ascent up the Organizational Ladder", *Journal of Social Issues*, 57(4): pp. 657-674.
- Jäger, Siegfried and Florentine Maier, 2015, "Analysing Discourses and Dispositives: A Foucauldian Approach to Theory and Methodology", In Ruth Wodak and Michael Meyer eds., *Methods of Critical Discourse Studies, 3rd Ed.*, pp. 109-136, London, Sage.
- 鄭暎恵 1994, 「ポスト近代国家と『新しい市民権』——非『択一』・自己決定権・マルチカルチャリズム」『年報筑波社会学』5号: pp. 72-82.
- 1996, 「アイデンティティを超えて」『岩波講座現代社会学第15巻——差別と共生の社会学』岩波書店: pp.1-33.
- 2003, 『<民が代> 斉唱——アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店.

- 金賛汀, 1977, 『祖国を知らない世代——在日朝鮮人二、三世の現実』 田畑書店.
- 金徳龍, 2002, 『朝鮮学校の戦後史——1945-1972』 社会評論社.
- 金堉我, 2004, 『在日朝鮮人女性文学論』 作品社.
- 金美善, 2008, 「移民女性と識字問題について——夜間中学に学ぶ在日コリアン一世の識字戦略」『ことばと社会』 11号: pp. 69-92.
- 金富子, 2011, 『継続する植民地主義とジェンダー——「国民」概念・女性の身体・記憶と責任』 世織書房.
- Kleinman, Sherryl and Kenneth H. Kolb, 2011, “Traps on the Path of Analysis”, *Symbolic Interaction*, 34(4): pp. 425-446.
- Lazar, Michelle M. and Cheri Kramarae, 2011, “Gender and Power in Discourse Lucas”, In Teun A. van Dijk ed., *Discourse Studies*: pp.217-240, London, Sage.
- 李仁子, 2005, 「マイノリティとジェンダー——在日コリアン二世・三世の見合いから」 田中雅一・中谷文美編『ジェンダーで学ぶ文化人類学』 世界思想社.
- Lucas, Kristen and Sarah J. Steimel, 2009, “Creating and Responding to the Gen(d)eralized Other: Women Miners’ Community-constructed Identities”, *Women’s Studies in Communication*,. 32(3): pp. 320-347.
- Mead, George. H., 1934, *Mind, Self, and Society*, Chicago, University of Chicago Press.
- 文部科学省, 1966, 昭和40年度学校基本調査報告書.
- 中村桃子, 2001, 『ことばとジェンダー』 勁草書房.
- 小熊英二・姜尚中編, 2008, 『在日一世の記憶』 集英社.
- 小熊英二・高賛侑・高秀美編, 2016, 『在日二世の記憶』 集英社.
- Paechter, Carrie, 2006, “Power, Knowledge and Embodiment in Communities of Sex/Gender Practice”, *Women’s Studies International Forum*, 29: pp.13-26.
- 桜井厚・小林多寿子, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』 せりか書房.
- 佐野通夫編, 2012, 『在日朝鮮人教育関係資料 1・2・3』 緑蔭書房.
- 猿橋順子, 2018, 「在日コリアン二世の親子間継承の語りに現れる生活文化と民族」『青山国際政経論集』 100号: pp.115-137.
- 徐阿貴, 2012, 『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成——大阪の夜間中学を核とした運動』 御茶の水書房.
- 宋基燦, 2012, 『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』 岩波書店.
- 宋連玉, 2005, 「在日朝鮮人女性とは誰か」 岩崎稔・大川正彦・仲野敏男・李孝徳『継続する植民地主義——ジェンダー/民族/人種/階級』 青弓社.
- 成美子, 1995, 『在日二世の母から在日三世の娘へ』 暁聲社.
- 上野千鶴子, 1996, 「複合差別論」『岩波講座現代社会学第15巻 差別と共生の社会学』 岩波書店.
- Van Dijk, Teun A., 2011, “Introduction: The Study of Discourse”, In Teun A. van Dijk ed., *Discourse Studies*: pp.1-7, London, Sage.
- Walkerdine, Valerie, Helen Lucey and June Melody, 2001, *Growing up Girl: Psychosocial Explorations of Gender and Class*. Basingstoke, Palgrave.
- Wenger, Etienne, 1998, *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. Cambridge, Cambridge University Press.
- 山根実紀, 2009, 「在日朝鮮人女性にとっての夜間中学——ライフストーリーからのアプローチ」『龍

谷大学経済学論集』49号1巻：pp.197-218.

梁仁實, 2003, 「戦後日本映画における「在日」女性像」『立命館産業社会論集』39号2巻：pp.35-55.

梁陽日, 2013, 「大阪市公立学校における在日韓国・朝鮮人教育の課題と展望——民族学級の教育運動を手がかりに」『コア・エシックス』9号：pp.245-256.

尹健次, 2015, 『「在日」の精神史1——渡日・解放・分断の記憶』岩波書店.

掲載決定日：2018（平成30）年4月4日

## Abstract

# Transformation of Gender Perspectives in the Life Stories of a Second Generation Zainichi Korean Woman: Dynamism with Ethnicity, Knowledge and Power

Junko Saruhashi

Yonsuk YU

This paper analyzes the change of gender perspectives in the life stories of a second generation Zainichi Korean woman. Among 13 interview participants, this woman was chosen as the focus of this study because she spoke of multiple types of discrimination experienced in her childhood: racial discrimination from the Japanese host society and gender discrimination within Zainichi Korean community and in her family. Analyzing her narratives through the framework of symbolic interactionism, two major discursive practices that revealed the transformation of gendered power relationships were observed. One was positioning perceived feminine abilities, such as nurturing or caring, to be universally human. To do so, she referenced *the views of the Japanese*. The second was when she talked about her self-employed business contributing to Korean ethnic education for younger generations; the gender perspectives concerning skills, knowledge, and ability were eliminated. She discussed the various skills and knowledge that were integrated to achieve success in her business without any categorization based on masculinity or femininity by referencing *her own views*. From these contrasting narratives of the transformation of gender perspectives in her life story, the author concludes that acquiring a solid and meaningful ethnic identity and economical independence helped her to reconstruct her gender-free perspectives. This research suggests the interconnectedness of gender, ethnicity, knowledge, and power.

## Keywords

gender perspectives, Zainichi Korean, symbolic interactionism, discourse analysis, life story interview